

「自校史教育の持つ可能性」

豊田 雅幸

はじめに

「立教大学の歴史」を担当したのは、2002年度・2005年度に続いて3度目のことである。

近年においては、自校史教育の重要性が認識され、実践する大学も多くなってきているようだが、そもそも立教におけるこの種の試みは、全カリの歩みとほぼ重なる歴史を持っている。

その最初の試みは、寺崎昌男教授が、1997年度前期総合A「大学論を読む」という授業(科目名は「現代の思想状況」)において、「立教大学とは何かを考える」というテーマの講義をされたことに遡る(本誌第3号参照)。

その後、1999年度からは、「歴史学の多様性」という科目に、「立教大学を考える」という授業が開設され、2001年度から「立教大学の歴史」となり、現在に至っている。

こうした「立教大学」を講じる授業は、寺崎教授の後、数人の担当者を経て、2002年度から「立教学院史資料センター」が受け持つこととなった。当時筆者は、同センターの学術調査員であったことから、この授業にかかわるようになった。

以後、日本近現代史を専門とする筆者に加え、日本近現代教育史・近代日本キリスト教史それぞれを専門とする学術調査員の3名で担ってきた。

また、この「立教大学の歴史」は、これまで池袋キャンパスのみでの開講であったが、2007年度は新座キャンパスでも開講され、同一の授業を両キャンパス

で講義する初めての年でもあった。

こうした歴史を持つ「立教大学の歴史」であるが、一私立大学の歴史とはいえ、その歩みは既に130年以上が経過しており、いざ講義をするとなると、なかなか厄介なものである。

特に、授業内容を考える上で最も参考にすべき“通史”は、1974年刊行の『立教学院百年史』を最後に出されていない。そのため、授業の組み立てにあたっては、この百年史と、その後、創立125年を期して刊行された資料集、『立教学院百二十五年史』とを参照し、試行錯誤を続けざるを得なかった。

現在では、「立教科目」が特色GPに採択されたことにより、これまでの蓄積を『立教大学の歴史』(2007年1月)というテキストにまとめることができたので、多少、状況は好転しているといえよう。

講義内容

さて、肝心の講義内容であるが、今年度は、講義全体の目標を、筆者自身の専門性から、「立教大学の歴史を、主に日本近現代史の視点から跡づけ、本学の歩みや特色を理解する」とこととした。

その意図するところは、文字通り立教大学の歴史を理解することにあるのだが、少し大げさに言えば、立教大学で歴史を理解することを意味している。

受講生の中には、日本の歴史をきち

んと学習する機会を持たなかった者や、歴史の勉強に苦手意識を持っている者もいる。そうした現状を考えた時、今現在、受講生自身が所属している立教大学という、極めて身近な素材を通じ、近代以降の日本の歴史に触れるという機会は、歴史教育としても有効だと考えるからである。

したがって、講義のポイントとしては、機関としての立教大学の歩みを、時代背景とのかかわりで捉えることを中心に置いている。

各回の講義テーマについては、以下に示すように、基本的に時系列でトピックを配置している。

1. オリエンテーション—大学史を学ぶ—
2. 聖公会の日本伝道と創業者ウィリアムズ
3. 立教学校の誕生
4. 文部省訓令第一二号と立教学院の成立
5. 高等教育制度の整備と立教大学の誕生
6. 関東大震災による被害と復興
7. 立教大学の拡大と戦争の影
8. 日米開戦とキリスト教主義教育の危機
9. 戦局の悪化と大学存続の危機
10. 敗戦から学園の再建へ
11. 新制立教大学への移行
12. 高度経済成長期以降の立教大学

今年度は、テキストを使用しての初の授業ということもあり、ほぼテキストの構成を踏襲した形となっているが、先行研究の関係上、旧制時代、特に戦時下の動向にウェイトを置いているのが特徴となっている。

授業上の工夫

他の授業においてもそうであろうが、特に歴史系の科目となると、受験勉強型の発想で授業に臨む学生も多い。そのため、この授業においても、単に立教大学の歴史に関する知識を覚えてもらうことに終始するのではなく、考える、というプロセスを重視して行っている。

例えば、立教大学の長い歴史の中には、その存在の意義や形態にかかわる、大きな転換点とも言える出来事が多々あるが、そうした事実を認識するとともに、なぜそのような出来事が起きたのか、その出来事にどのような意味があるのか、さらには、そのような出来事を当時の立教大学の構成員がどのように受け止めていたのか、というようなことを、共に考えてもらうことである。

そのため、授業のスタイルとしては、レジュメを配布することで、各回のテーマや話の流れを明確にし、また、文書資料の配布や、写真資料のスクリーンへの投影により、可能な限り歴史を肌で感じてもらい、考える素材を提供するように努めている。

さらに、各回の授業の最後には、授業において考えたことや感想などを、コメント用紙に必ず記入してもらっている。

しかし、テキスト以外にこうした配布物等の教材があるためか、そのテキストを授業に携帯してきていない学生も散見された。もちろん、授業中には、必ず何度かテキストを開かせる機会を設けてはいるが、効果的なテキストの利用法を考えさせられたのも事実である。

学生の反応

各回のコメントに加え、最後の授業においては、講義全体に対するコメントも記入してもらったが、幸いなことに、この授業の意義を積極的に評価する声が多かった。

特に、普段何気なく通っている立教大学にこのような歴史があったのか、という素朴な発見や驚きを指摘するケースが多く見受けられる。そして、そのことが、大学に対するイメージや意識の変化を促す効果をもたらしているようである。

なかでも、立教大学の歴史に触れたことで、立教への愛着・誇り・尊敬といった思いを深めた、さらには、自分への自信を深めた、または、学生生活を見直すきっかけとなった、というような反応が少なからずあったのが印象的である。以下のようなコメントが、その一例である。

「この授業を通して、立教大学の様々な歴史、裏話のようなものがたくさん知ることができてよかったです。大学をより好きになるために、それが歩んできた道を知ることとはとても大切だと思いました。実際、立教の苦難などを知ってより愛着がわくというか、もっとこの大学で学んでいるということを誇りに思ってもいいかもしれないと思いました。そして大学の発展を担っているのは、大学の偉い人だけではなく、私たち学生1人1人も当てはまるのだと思いました。」(1年)

「このような機会がなければなかなか大学に関して学ぶことがなかったと思うので基礎知識として受けてよかったです。少しなあなあになってきていた大学生活についても色々考えることがありました。せっかく与えられたチャンスなのだから、私も「主体性」を持って様々なことを吸収していきたいで

す。」(1年)

また、大多数というわけではないが、立教大学の歴史を考えることで、より多くものを授業から引き出してくれた、以下のような例も紹介しておこう。

「後期、この立教大学の歴史という授業をうけて感じたことは、単に立教大学単独の歴史を学んでいるのではないということでした。というのも、明治時代から今に至るまでどのような政治体制、国内外の情勢などの変化を受けて変わってきたかを学ぶことは、1つの物事は単独で進んでゆくのではないということ、大きな視点から柔軟に物事の変化をとらえてゆけるか、考えられるかというものを手に入れられたと思っています。学問を学んでゆく上では最も大事な視点ではあるが最も忘れやすいものだと思います。それを改めて実感しました。」(3年)

「この授業では、大学の歴史を通して環境や人間の価値などの変化を見ることができた気がします。それに大学がどのように対応してきたのか、何故、今大学はこうあるのか、大学の持つ役割・機能について考えることで、自分が大学で学ぶことに意味を見出すきっかけになったと思います。半期間この授業を受けてよかったと思います。」(2年)

「自分が通う大学の歴史を学ぶことは、とても意義あることだと思います。現在ある大学の教育方針が、何に源泉をもち、どのようにして組み立てられ、成り立っているのかという過程を知ること・分かることは、その大学に通い学ぶ私達にとって、学びの幅を広げるという意味で、有意義なことです。今後、レポートを書くことになると思いますが、その過程において、立教の現在と過去を照らし合わせ、現在の立教の形成過程を理解し、学びの幅を広げられるように作成していきたいです。」(1年)

おわりに

授業を終えて思うことは、学生の反応にも表れていたように、自校史教育の持つ意義および効果は、単に自校の歩みを知るといふことにとどまらない、様々な可能性を秘めているということであった。

それと同時に、いかに良い自校史教育を展開できるかどうかは、担当者の力量もさることながら、いかにその資源を蓄積しているかにかかっている、ということである。

前にも少し触れたが、この授業は、過去に編纂された立教の公的な年史や、立教学院史資料センターを中心とする研究成果がベースとなっている。特に、戦時下に関する研究は、近年飛躍的に進歩したことから、過去の年史の水準を大きく上回り、授業へのフィードバックを可能にしている。総合B群に「立教学院と戦争」が開講されているのも、こうした研究活動の成果である。

しかし、その一方で、先行研究の薄いところ、例えば、資料的な制約から研究が進んでいない大正・昭和初期や、基本的に手付かず状態の新制以降などは、どのような内容をどのような形で学生に提示したものか、正直、非常に頭の痛い課題でもあった。

自校史教育の重要性が認識されるにしたがい、その基盤を支える存在としての大学アーカイヴズ（資料館・文書館）の重要性が、徐々に認識されるようになってきている。立教における自校史教育の水準をさらに高めるためにも、アーカイヴズ組織としての立教学院史資料センターの今後の活動が、ますます重要になってくるのではないだろうか。

とよだ まさゆき
(本学文学部助教)